生駒経済論叢　第10巻第２号　2012年11月

マーティノーの最初の小説 *Deerbrook*
――姉妹の相互依存と独立の物語――

吉　野　成　美

要旨　本稿では，19世紀イギリスにおいて活躍した女性文筆家，ハリエット・マーティノーが挑んだ最初の小説 *Deerbrook* について，イギリス家庭小説の系譜の中に入れてその内容を他の作品と比較検討している。*Deerbrook* は，ジェイン・オースティンの小説でもしばしば描かれる，いわゆる「姉妹もの」をプロットの中核にすえて物語が発展していく形をとるが，この小説のオリジナリティは，姉妹の恋愛と結婚を描きながらも，実のところ，姉妹の相互依存と困難の克服を経て独立する過程にあることを本論では検証している。

キーワード　ハリエット・マーティノー，*Deerbrook*，姉妹の物語
原稿受理日　2012年９月26日

Abstract　This paper focuses on Harriet Martineau's first novel, *Deerbrook*, among the family novels of the nineteenth century England.　Following the tradition of the contemporary novels, *Deerbrook* deals with two sisters' love romance and marriage, which is placed at the center of the story.　Martineau's originality lies in the fact that she emphasizes the process of the two sisters' becoming independent, overcoming their difficulties and interdependent status in marriage life, rather than romantic episodes and plots of how they find their real love.

Key words　Harriet Martineau, *Deerbrook*, Sisterhood

経済学の大衆化に広く貢献した作品として有名な『経済学実例集』の成功からおよそ7年後，文筆家として堂々の地位をイギリス国内で築き上げたハリエット・マーティノーは，これまでの写実的でジャーナリズム的スタイルとはまったく異なる，女性の主人公を配した長編小説，*Deerbrook* を発表し，小説家としてのデビューを果たした。『経済学実例集』の出版で，同時代の経済学者，および，教育者たちの系譜に属していたマーティノーだが，*Deerbrook* の発表と共に，彼女の名前は，当時の女性作家たちや，その作品群の系譜という異なるジャンルの文脈においても語られるようになり，文筆家としてさらなるキャリアを積んでいくことになった。

本稿では，『経済学実例集』で大きな成功をおさめた後のマーティノーの文筆活動に関して，彼女がこれまでとはまったくジャンルの異なる「フィクション」に敢えて挑んだことに着目し，彼女にとって初の小説となったこの *Deerbrook* が，19世紀のイギリス小説の系譜の中で果たしてどのような地位をしめる作品であるのか，内容を精読しながら考察していく。

1. 同時代小説家との比較に関する先行研究

『経済学実例集』で大変な人気を博したマーティノーにとって，小説を手掛けたのは *Deerbrook* が最初の作品であることから，この小説はマーティノー研究家にとってはそれだけで注目に値するものである。マーティノー自身，これまで手掛けてきた社会派の啓蒙的物語集から大きくジャンルを転向して挑んだ初の小説ということになれば，そこには当然，それなりの準備と覚悟が必要であったことは想像に難くない。マーティノーは，『経済学実例集』執筆の折には，彼女より先に同ジャンルにおいて活躍していたジェイン・マーセットの作品を意識，参考にしながら，最終的には先達の示した見本を超越して自身のスタイルを確立していった。それでは，小説を手掛けるにあたってはどうだったのであろう。ここに浮上するのが，19世紀前半の英国において，小説家として人気を誇っていた，ジェイン・オースティンの存在である。

マーティノーはオースティンをどのようにとらえていたのだろうか。自伝では，*Deerbrook* を手掛ける少し前の日記を引用した部分においてオースティンの作品を次のように評価している。

かつての愛読書だった，オースティンとスコットの作品をこれまで以上に喜びを

もって読むことができる。

『高慢と偏見』を読了。すばらしく良くできた作品だ。オースティンは哀感（の描写）をとても恐れているようだ。私自身は試してみたく思う。暖炉のそばで髪の毛をとかす。とても寒い。風邪のために良く眠れなかった。それにしても，貧しい人はこの気候をどうやって生きているのだろう？　煉瓦敷きの貯蔵庫で火の気もないところにいる彼らのことを忘れることはできない。（3：214）

『高慢と偏見』はオースティンの作品の中でも特にマーティノーの愛読書であったようで，自伝の中ではしばしばこの作品について言及がなされている。このことを受けて，19世紀のヴィクトリア小説研究家のディアドリー・デイヴィッドは，*Deerbrook* とオースティンの作品の中でも特に『高慢と偏見』を読み比べ，マーティノーがオースティンの模倣を試みたものの，決して成功してはいない点について次のように述べている。

Deerbrook を読むと，オースティンの語りの技術の複雑性が彼女［マーティノー］の理解もしくは能力を超えていることだけでなく，オースティンの精巧に均等のとれた散文体もまた同様に，彼女の才能を超えていることが確信できる。（中略）「恋愛だけが主な体験であり，女性の人生における唯一の目的であるのだろうか？」*Deerbrook* の語り手は問いかける。まだ経験の浅い現代風のオースティン小説の読者ならこの手の質問をするかもしれない。だが，小説がそのような質問を言葉にすることなくして答えるところが，オースティンのなせる技なのである。（77）

『高慢と偏見』を執筆時にはすでに小説家として成熟していたオースティンと，多くの作品を世に輩出して文筆家として名が知れていたとはいえ，小説を手掛けたのが初めてであったマーティノーを，オースティンの創作テーマである「恋愛」の描き方のみを取り上げて比較検討することは，少なからず無理があるのではないだろうか。確かに，*Deerbrook* はヴィクトリア時代の小説の系譜に位置しており，そこには19世紀的な男女の恋愛と結婚について描かれている点でオースティンの作風と一定の共通項が存在してはいる。とはいえ，600ページからなる長編小説として重層的な内容である *Deerbrook* は，恋愛と結婚以外にも社会的に多彩なテーマを扱っているのもまた事実である。『高慢と偏見』を読み終えたマーティノーが，夜の寒さに言及しながら，貧者がこの寒さをどうやってしのぐのか，という思いを抱くとき，それはそのまま，オースティンが自身の小説では決して描かな

かった貧困層がマーティノー自身のオリジナリティにつながっていくことを示唆しているといえる。

デイヴィッドがマーティノーを先達の小説家オースティンの比較しているのに対し，後続作家であるブロンテ姉妹やジョージ・エリオットの作品への影響を主に論じているのがエヴァ・ファイジェズである。ファイジェズは，*Deerbrook* は，マーティノーが「それなりの重要性を備えた小説家になりえたことを表している」作品であり，当時台頭していた社会勢力としての中流階級に属する人物を物語の中心にすえている点において，次世代で活躍することになる「ジョージ・エリオットを予期させる」と高く評価している。彼女はまた，*Deerbrook* がその登場人物の一人，マライア・ヤングのガヴァネスとして細々と暮らしている様を描いていることをふまえ，当時の社会における中流階級の女性たちが経済的自立の困難さから不安定な立場におかれていた問題点を，彼女とヒロイン姉妹との会話において繰り返し示しているという意味において，後続作品であるシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』の申し分ない先駆けとなっていることもあわせて指摘している(115-116)。

確かに，ガヴァネスを扱っているという意味において，*Deerbrook* が部分的に『ジェイン・エア』と類似し，その作品に影響を与えているというのは，あながち見当違いの指摘ではない。両親の庇護がなく，また，所属する階級の束縛とその聡明さゆえに肉体的な労働で日銭を稼ぎだすこともできない未婚女性特有の社会的立場の危うさを切実に訴えるマライアの境遇は，ジェインのそれと同じである。しかしながら，この指摘の最大の弱点は，マライアはヒロインではないが，ジェインはヒロインであるという点であろう。二人の姉妹をヒロインとして物語が進行する *Deerbrook* において，あくまでもヒロインの友人・相談役という役回りであるマライア・ヤングの作中における存在感は決して大きいとはいえない(1)。彼女はまた，ジェインと異なり，ガヴァネスという立場を利用して，雇用主，もしくはその家族と結婚できるという大団円の結末も用意されてはいない。むしろ，ヒロイン姉妹の一人が，かつて自分自身，思いを寄せたことのある男性と結ばれるのを見守る一方で，自身の問題は解決の糸口はないままに終わるという，極めて現実的な生き方が語られている。マライアとジェインがともに「孤児」でガヴァネスの身分であるという境遇のみを取り出して，二人を同列に並べて論じることには問題が残るのである(2)。

---

(1)　アレクシス・イーズリーは，*Deerbrook* におけるマライアは，そのおかれた立場の周縁性が強調されることで，物語の中核にある「マリッジ・プロット」をしばしば中断させる機能をもっているとし，マライアの役割の重要性を強調している。

(2)　最近の批評の中で，例えばリーザ・スコールズは，マライア・ヤングは決して「ただ見るだけ」↗

その意味において，小説 *Deerbrook* が，ガヴァネス小説として読めると指摘しながらも，それ以外の物語要素の存在を同時に提示しているヴァレリー・サンダーズの論は説得力をもつといえるだろう。ヴァレリーによれば，この小説にはヴィクトリア時代の世相と，当時，小説で好んで描かれたテーマを如実に反映した物語の三つの要素が混在しており，それぞれの読みが可能になると主張している。その一つは，先の批評でも指摘のあった，マライア・ヤングの人生に集約されるガヴァネス受難の物語であるわけなのだが，サンダーズはそれ以外にも，この小説が，当時，社会の中核として台頭しつつあった中流階級の専門職である医師の視点―特に田舎医者（country doctors）―が盛り込まれた作品であるということ，また，オースティンの小説に慣れ親しんだ当時の読者層に人気の高かった，いわゆる「姉妹もの」を扱った物語としても読めることを指摘している(3)。

Deerbrook が600ページに及ぶ長編作品であることを思い起こせば，この作品において複数の物語要素が存在するという自体は，別段，驚くに値しない仕掛けであろう。ただし，ここで見逃してはならないこととして，*Deerbrook* における主要登場人物の数は，総勢十人程度ときわめて小規模であり，さらには，物語の冒頭から結末まで，ほぼ同じメンバーで構成されているという点において，物語の時空間自体は閉じられたものとなっているという事実である。つまり，ごく限られた人員と範囲の中で繰り広げられる，きわめて閉鎖社会の物語構造をもつ *Deerbrook* においては，その内容量に匹敵する数の物語が複数混在していたとしても，それらは，多くの長編小説で見られるように，物語の時空間を広げることにはならない。むしろ，複数ある物語要素それぞれが作中で繰り広げる話の展開―あらすじまたはプロット―が単体で乱立して全体を構成しているのではなく，互いのプロットに深く密接に影響を及ぼしあいながら，一つの作品に仕上がっているのがこの小説の特筆すべき点なのである。

以上，ヴィクトリア時代の小説研究の系譜において論じられる *Deerbrook* に関する論評をふまえた上で，本論において新たな読みを提示できるとするならば，それは，サンダーズの主張する，複数の物語要素の再定義と，それらが互いにどのように関係しあいながら一つの大きな物語へと完成しているのか，その関連性を指摘することである。

↘の消極的な傍観者ではなく，「批判もする」積極的な傍観者であって，「一種の権威と優位性」があることを評価している。ただし，その根拠に挙げているのは *Deerbrook* の最後の場面のみであり，マライア自身がこの小説の中で中心的役割を果たしているとまでは言えない（74）。

(3) Sanders, xx-xxxi.

2. 出発点としてのジェイン・オースティン

マーティノーは，自身の物語形式や登場人物の描写の技術に関しては，自身の名前を世に知らしめた『経済学実例集』のシリーズで既に実績があった。ただし，『経済学実例集』は物語形式を採用しているとはいえ，あくまでも物語風，もしくは小説風，という程度のことであり，現実社会における様々な事象に関して，経済学の見地からその問題点や矛盾点を指摘し，解決方法を見出そうとする，あくまでも啓蒙的側面が前面に出ることが許されている教本であった。ジャンルとして，真の「小説」―しかも長編の小説である―に初挑戦するとなれば，そこにはまず，なるたけ自然を装いつつも，読者をひきつけるためのドラマ性を兼ね備えた物語の状況初期設定を構築する必要がある。それでは，その状況設定はどのようなものだったのだろうか。

小説 *Deerbrook* は，そのタイトル名である *Deerbrook* という田舎の村に住むグレイ家の屋敷に，バーミンガムから遠い親戚である適齢期を迎えたイボットソン姉妹がひと夏を過ごしに訪れるところから始まる。姉妹は父親を最近に亡くし，母親もそれより前に他界しており，互いを唯一の家族として精神的に依存している。血を分けた姉妹といえども，その容姿と性格は全くの正反対で，姉のヘスターは端正な顔立ちで，*Deerbrook* の村に到着するやいなや，グレイ夫人をはじめ，人々の注目の的になる。一方，妹のマーガレットはその容姿こそ姉には劣るが，姉に比べて思慮深く聡明であり，何かとすぐに感情を高ぶらせる姉よりは常に冷静に行動していることから，結果として姉よりも人間性がすぐれている存在として描かれている。この設定からも容易に推測できることではあるが，小説の語り手すなわち著者であるマーティノーの視点は，姉妹のうちマーガレットの側に立った描写になることが多く，厳密に言うと，真の意味でのヒロインは妹のマーガレットということになるだろう。そのほかの主な登場人物には，姉妹を受け入れるグレイ一家の隣に居を構えるロウランド夫妻とその子供たち，また，同じく近所に住むロウランド夫人の実母エンダービー夫人と息子のフィリップ・エンダービー（ロウランド夫人の弟），両家の子供たちのガヴァネスであるマライア・ヤング，そして，村の青年医師，エドワード・ホウプが挙げられる。小説では，これら主要登場人物はその全員が第一章において，グレイ夫人と子供たちからイボットソン姉妹に他愛ない噂話という形式で言及され，読者は登場人物間の人間関係をほぼ正確に把握できるよう，細やかな配慮がなされている。また，これら登場人物の顔ぶれは物語を通してほとんど変わることなく，長編小説においてありがちな，

中途から登場して物語に新たな展開をもたらす人物が追加されるということはない(4)。

小説は三部構成になっており，第一部では姉のヘスターがエドワード・ホウプと出会い，周囲のお膳立てを経てとうとう結婚にこぎつくまでの進展が表面上の中心的テーマとなっている。この表面上のあらすじ展開と並行して語られるのは，ホウプ，マーガレット，フィリップ・エンダービー，そしてマライア・ヤングという，ヘスターをのぞく適齢期の四人が抱く複雑な恋愛感情のもつれあいであり，この関係が，ホウプとヘスターの結婚後の生活に微妙な影を落とすことになる布石となる。第二部では，結婚後のホウプと姉妹の村での生活において，ホウプが根拠のない村人のゴシップによってじわじわと孤立していき，それは，診察依頼の激減とそして貧困層の暴動と襲撃に発展していく。また，ホウプとヘスターが結ばれた後，中核となるはずのマーガレットとエンダービーの恋愛関係に関しては，互いへの思慕はゆるぎないにもかかわらず，ホウプに関するゴシップがもたらした被害と同様，根拠のない噂話という外的要因によって，二人の関係が常に不安定な状態におかれる様が描かれている。そして物語の最終局面である第三部においては，村全体が社会の不景気のあおりをうけて貧困にあえぐ中にあって疫病が流行するが，この災いがホウプの医師としての腕前の再評価へとつながり，ホウプ夫妻は村全体からようやく受け入れられる存在となる。同時に，マーガレットとエンダービーの関係も，憶測で広がった噂話とデマを信じてしまっていたエンダービーの大きな誤解も解け，最後に二人がめでたく結ばれたところで，物語は幕を閉じる。

上記の物語のあらすじ概要から，一つ明確であるのは，小説 *Deerbrook* における状況設定は，オースティンの『高慢と偏見』よりはむしろ，彼女の小説家デビューとなった処女作である『分別と多感』のそれと多くの共通点がみとめられるという事実である。まず，両作品共に，ヒロインには性格の異なる二人の姉妹が配置されている。もっとも，『高慢と偏見』においてもヒロインは二人の姉妹であるが，『分別と多感』と *Deerbrook* の両作品における姉妹たちの場合，自分たちを守ってくれるべき父親と死別し，精神的に，物質的に，そして社会的にと，あらゆる意味において苦しい状況に立たされ，また，それゆえに，父親の庇護の代わりを務めてくれる「夫」を見出す必要があるという状況設定となっている点でより似通った状況になっているといえる。加えて，『分別と多感』における思慮深い姉と感情表現豊かな妹という組み合わせは，*Deerbrook* ではそのままそっくり姉と妹が入れ替わっただけにすぎない。そして両方の物語ともに，父親の死をきっかけに新た

(4) 登場人物のうち，労働者階級や貧困層に属する村人に関しては例外である。

な環境で生活をする姉妹が，お節介でうわさ好きの既婚女性たちを主とする新たな人間関係を構築する過程において，恋愛の対象となる独身男性と必然的に知り合い，紆余曲折を経た後に，結婚するまでが描かれている(5)。

興味深いことに，マーティノーは自伝の中でオースティンの作品の中でも『高慢と偏見』には何度も言及しているのに対し，『分別と多感』に関しては，不自然なまでに触れることはしていない。とはいえ，マーティノーはその自伝において，自身が読んだことを明確にしている作品のみならず，小説家としてのオースティンに対する全体的な評価を行っていることから，彼女が『分別と多感』を未読であったとは到底考えられないのも事実である。また，この作品がオースティンにとっては初めて世に出した小説であるならば，なおさら，初の小説を手掛けようとするマーティノーがこの作品に対して無関心でいたとは考えにくい。前述の批評家デイヴィッドが，*Deerbrook* を『分別と多感』ではなく『高慢と偏見』との類似性に関して論じるだけにとどめているのも，マーティノーの自伝を参照した際に，本人が言及していない作品をあえて *Deerbrook* と比べるわけにはいかなかったという苦しい理由があったからなのでないだろうか。いずれにしても，そう推測することが決して見当違いではないほどに，*Deerbrook* は，ヒロインの恋愛と結婚がテーマの部分に関しては特に『分別と多感』の概要と酷似している。

仮に *Deerbrook* が『分別と多感』を意識して著されたとするならば，なぜ，マーティノーは自伝において，あえて触れない選択をしたのだろうか。可能性として，マーティノーの「沈黙」は，逆に，自身の作品である *Deerbrook* が『分別と多感』の模倣から生まれたことを彼女自身が公表しなくとも，当時の読者にはお見通しであることをある程度予測していたということが考えられる。言葉をかえていうならば，19世紀の読者にとって，オースティンが扱う恋愛と結婚，いわゆるマッチメイキングのテーマはわかりやすく受け入れやすい内容であった。マーティノーは，物語の大枠テーマとして先達の作品のそれをそのまま取り入れ，一見，似通った設定を導入部で示すことにより，読者への便宜をはかったのかもしれない。ただし，初期的な設定が酷似していたとしても，最終的に，『分別と多感』と *Deerbrook* では，扱われる社会問題の性質が全く異なる展開を見せていく。その部分に自身のオリジナリティを自負していたマーティノーは，自分からは敢えて『分

(5)　ついでながら，姉妹のうちの一人の恋愛対象となる男性の名前はどちらも「エドワード」である。また，『分別と多感』に登場する三女の名は「マーガレット」といい，*Deerbrook* のヒロインの一人と同じ名前である。こういった名前の選択は，恣意的であるとはいえ，似通った状況設定上で同一の名前が使用されれば，自ずと読者の意識と関心は両作品の類似性へと向かうのは必然であり，作者としてもその点を計算した上で共通の名前を使用したと言えるのではないだろうか。

別と多感』とのインターテクスチュアリティについて，わざわざ言及する必要がなかったのかもしれない。

3. オースティンからの離脱とマーティノーのオリジナリティ

これまで検証してきたように，マーティノーは自身にとって初の小説となる *Deerbrook* 執筆にあたり，恋愛と結婚を中心テーマにすえるオースティンの小説から大いにその形式や概要を取り入れ，ヴィクトリア時代の家庭小説にふさわしい体裁を整えたといえる。しかし，当然ではあるが，*Deerbrook* はオースティン作品の模倣の域にとどまったわけでは決してなく，マーティノー自身のオリジナリティを兼ね備えた内容に仕上がっている。本論ではそのオリジナリティを，サンダーズの指摘する「姉妹もの」としてのプロット構成内に見られる工夫に見出し，詳細を検討していく。

いわゆる「姉妹もの」のカテゴリーに分類されるであろう *Deerbrook* だが，この小説で描かれる姉妹は，対照的な性格をもちながらも，互いへの過度な依存癖のために，象徴的なレベルにおいて，あたかも「二人で一人」として機能している。オースティンの小説における「姉妹」は，互いを相談・協力相手として必要としているが，最初からそれぞれ別に意中の男性が存在し，各々がその男性との恋愛を成就させ結婚へと導かれるため，並行して二つのプロットが存在する。対する *Deerbrook* では，その「姉妹もの」プロットは，姉妹が常に「二人で一人」として行動を共にするため，終始一貫して一つしか存在しない。もちろん，二人の姉妹にはそれぞれホウプとエンダービーという二人の男性がその恋愛対象として存在するので，一見，二種類の恋愛プロットが交錯しているように見受けられるかもしれない。だが，*Deerbrook* における人間関係は，幾重にもまたがる三角関係が常に入り組み，ほどくことが難しい一つの塊として存在している。例えば，マーガレットに惹かれながらヘスターと結婚するホウプ，マーガレットとホウプの関係を最後まで疑うエンダービー，そして，エンダービーに好意を抱きながらも彼とマーガレットの結婚を見守るマライア，というように，姉妹を中心にした登場人物たちの相関関係は必ず二つ以上の異なる輪の中に重なって配置されているのである。そして，物語は，この入り組んだ塊に，外界からのマイナス的要素の介入，すなわちホウプ家を襲う二種類の大きな災い，（ホウプ家襲撃事件と疫病の発生）によって，徐々にその交錯する人間関係のもつれが解除され，姉妹たちは最終的にそれぞれ意中の男性の伴侶となって相互依存の関係を解消するまでの様子を描いていると言える。

父親との死別で，唯一の家族としてお互いが存在する二人の姉妹，ヘスターとマーガレットは，*Deerbrook* の村に到着した晩，グレイ家の寝室で二人きりになったときに，互いの依存関係を確認し合う。

「私たちにできることはただ一つだけなのよ，ヘスター。」マーガレットが姉の肩に頭を乗せて言った。「できる限り，一緒にいることを最大限に利用しなくてはいけないってこと。一瞬たりとも，私たちの間に曇りの影があってはならないということ。お互いを本当に信頼し合い，心の中を完全に開いておくということ。というのも，私は前にどこかで読んだり聞いたりしたのだけれど，二つの心は決して開いておくことはできないそうだから。」

「そんなことを言う人はそれがどういうものなのかわかっていないのね。」ヘスターは叫んだ。「私は確信しているわ。あなたに言えない考えや気持ちなんて，私の中にはこれっぽっちもないわ。あなた以外の人に対してはそうではないけれど。」

（中略）

「それなら，私のことを決して疑ったりしないでね，時々そうしていたみたいに。私があなた以外の人を好きなのではないかとか，私があなたと違うように感じていると，あなたが考えていることがわかるとき，私がどれだけ落ち込むか，想像もできないでしょう。」(21-22)

このように，どんな状況にあっても，互いの心が離れないことを誓って *Deerbrook* での新生活を開始する姉妹は，二人の前に現れる村人との関係を築く中で，その強固だったはずの絆を危うくしていく。そして，特に二人の関係にくさびを打ち込む人物として現れるのが，マライア，ホウプ，エンダービーの三人である。

グレイ家とロウランド家の子供たちの家庭教師であるマライアは，同年代の未婚女性であるイボットソン姉妹とすぐに打ち解け，仲良くなる。しかし，ドイツ語を勉強する目的で一緒の時間を過ごすことが多くなったマライアとマーガレットは二人だけで親密な友情関係を築くため，そのことでヘスターは妹と自分の絆が危うくなったかのように感じ，嫉妬の気持ちに苛まれることになる。

姉妹のどちらも，*Deerbrook* に到着した夜に，窓辺でした会話の内容を覚えていた。それを覚えていたから，マーガレットはヘスターにマライア・ヤングに対する自分の

気持ちのすべてを打ち明けた。賞賛と憐みと尊敬の気持ちなどである。マライアが彼女に打ち明けた秘密の話は自分の中にとどめておいても（中略）自分自身の考えや気持ちに関しては姉にすべてを知らせた。その結果，ヘスターは，マライアがマーガレットの心の多くを占めていること，ヘスターが共有できない新たな関心がマーガレットの心に芽生えていることを知ったのだった。彼女もまた，［到着の晩に交わした二人の］会話を覚えていたが，その精神に従って行動する勇気は持ち合わせていなかった。(69-70)

同性の気取らない交友関係においても個人として行動することが制限されるイボットソン姉妹にとって，ホウプの出現は，マライアの時と同様に，二人の関係に再び混乱をもたらす。だが，マライアのときと異なり，ホウプは決して二人の仲を引き裂く存在にはならない。彼が，最終的な結婚相手となるヘスターではなく，マーガレットを実のところ愛していたため，結婚生活はホウプとヘスターの二人ではなく，マーガレットを入れた三人で始まり，それゆえに，姉妹はホウプ家に同居することで自分たちの絆を保ち続けることになる。

ホウプがマーガレットに惹かれつつもヘスターとの結婚を結果的に選択したのは，表向きには，自分に好意を寄せるヘスターや，二人の結婚を推奨する周囲のお膳立てに抗えなかったという受動的で消極的な理由ということになっている。しかし，そもそもホウプにとって，ヘスターかマーガレットか，という選択肢はそれほど重要だったのだろうか。マーガレットはヘスターの一部であり，ヘスターもマーガレットの一部であると考えるならば，ホウプが姉妹のうちどちらか一方に惹かれたとしても，その一方にもう一方が内在化している以上，理屈の上で二人の女性と一度に結婚することになると考えられる。そして実際，興味深いのは，結婚式後，ホウプは，その新居に妻となったヘスターと共に，彼女と離れられない関係にあるマーガレットをも迎え入れ，三人は新生活をスタートさせているという事実である。もともと，イボットソン姉妹が *Deerbrook* に来たのは，父方の親戚であるグレイ氏の招きに応じたからであり，その点で，父親亡き後の姉妹の後見人はグレイ氏であった。ヘスターが結婚してホウプ夫人になれば，彼女の法律上の後見人はグレイ氏からホウプ氏にかわるが，本来そのことで，妹マーガレットの後見人がグレイ氏からホウプ氏に代わる必然性はない。言い換えるなら，マーガレットは彼女の結婚相手が現れるまでグレイ家にとどまることもできたし，またそうするのがある意味自然だったのではないだろうか。それをあえてすることなく，結婚生活を始めた姉夫婦宅で家族として同居

するという生活形態は，実質的な意味においても，象徴的な意味においても，ホウプを中心とする多重婚と定義することもあながち的外れとは言えないだろう。

もっとも，物語の語り手は，この展開が不自然と悟られない工夫として，次のように，姉夫婦と同居するマーガレットの事情について説明をしている。

> マーガレットが姉と一緒に住むことを疑う者はいなかった。彼女には他に家はなかったし，彼女とヘスターはこれまで離れ離れになったことがなかった。今，二人が離れるべき理由は見つかりそうもなかったし，姉妹が一緒にとどまるのにあらゆる理由があった。マーガレットはこれに反対しようとは思わなかった。［遺産相続によってあてがわれる］年収70ポンドのうち50ポンドを家族［ホウプ家］の貯蓄にまわし，そうすることで彼女の扶養のことでは誰にも世話にならずにすむのだ。(162-3)

「他に家はな」く，「離れ離れになったこと」もなく，「離れるべき理由は見つかりそうもない」と，マーガレットの姉夫婦との同居は，幾通りもの理由が並べ立てられ，正当化されている。とりわけ，マーガレットがホウプにとって経済的負担とならないようにするため，遺産相続分の収入の大半をホウプ家に入れるという「説明」を最後に挟み込むことは，マーガレットが決して経済的にホウプの扶養下にないという事実を強調するために必要だったのかもしれない。確かに，グレイ氏を後見人としている限り，マーガレットはグレイ家に対して金銭の支払いをする必要はなかっただろう。(なかったからこそ，そのことには言及もされていない)。彼女がホウプ家に移り住んだとしても，今度は自身の食い扶持分をホウプ家の貯蓄にまわすことで，グレイ氏に対してそうだったのとは異なり，ホウプに対して経済的な負い目を感じないですむ関係が築かれていることが力説されている。しかし，マーガレットにあてがわれる年収70ポンドは，その同額だけ，ヘスターにも遺産としてあてがわれている金額である。つまり，姉妹は20ポンドの差こそあれ（差があって当然ということもできる。姉は制度上で認められた実質的な婚姻関係であり，妹は，制度上では決して認められないあくまでも象徴的な意味における疑似婚姻関係なのである）それぞれが持参金を携えてのホウプ家輿入れであったということもできるのである。

三人の同居については，ホウプ自身もまったく望んでいなかったという事実は，ここで強調しておいても良いだろう。新婚旅行から帰ってきたエドワードは，新居で二人の帰宅を迎え入れるマーガレットに対し，ヘスターに導かれて「義理の兄としてのキス」をする際，早速の苦悩を味わうことになる。「ホウプの心は，兄のような心持ちと単純さでキス

ができなかったことで，一瞬，かき乱された」(199)。その後，ホウプ家の雑用を受け持つ召使の者たちが部屋に通され，ヘスターは顔を赤らめながらホウプの前で彼らの女主人として初の応対を行う。ヘスターの美しさは「見ないでいるのが不可能なほど」であり，「マーガレットは彼女の義理の兄のほうを見つめて二人は微笑みをかわす」のだが，マーガレットの笑顔を前にホウプの笑顔はかき消され，彼はまじめな顔つきにかわってしまう(201)。これらの事象から明らかなのは，ホウプは決してこの（客観的視座からの）多重婚の状況を自ら望んだわけでも，また，肯定的に受け入れているわけではないということである。しかし，ここで問題にすべきなのは，あくまでもホウプがそれをどう思うか否かではなく，ヒロイン姉妹が二人で一人として存在し，機能している現実であり，ホウプの苦悩が強調されればされるほど，結婚という絶対的な制度下にあっても，姉妹の絆が切り離せないほど強固であるという事実なのである[(6)]。ホウプを中心に二人の姉妹が共存する新しい形態の生活において，姉妹は，主人であるホウプに対して分業体制で妻の役目を果たしている。例えば，新婚旅行から帰ったばかりのホウプが，寒い夜の中，往診に出かけなければならなくなった際に，ヘスターはそれを嘆く。これに対してホウプは「医者の妻としてはなんとも無邪気な言い様だ」と笑う（202)。医者の妻としてまだ未熟者である新婚気分の抜けない姉とは対照的に，マーガレットは，「まだ自分の家の勝手がわかっていない」ホウプがペンとインクを探していると，それらをすかさず用意し，彼に手渡しする(203)。ホウプにとって，ヘスターは制度上の「妻」であるが，実際の生活面において「妻」の役目を果たすのはマーガレットである。また，精神面では妹マーガレットがホウプの思慕の対象となる一方で，肉体面では姉ヘスターが制度上の妻としてホウプの相手となる。こうして生まれたホウプとヘスターの赤ん坊をマーガレットはわが子のように可愛がる，という後々の成り行きは，この三者の関係が，二人の女性による夫への分業奉仕という形態をとる，象徴的な意味での多重婚の説明となっているのではないだろうか[(7)]。

---

(6)　ジャック・カーンは，「エドワード・ホウプの方向違いの欲望」のおかげで「ユートピア的姉妹愛」は「性のライバルの世界に陥らされる」ことになっていると指摘し，女性同士のつながりは必ずしも「祝福されて」しかるべきものというわけではない，という興味深い見解を提示している（220-221)。確かにヘスターはたえずマーガレットに嫉妬心を抱き，姉妹の関係は必ずしも常に良好とは限らない。だがそれでも二人は決して離れることはなく，それはカーンが断言する「生物学上の偶然と経済的必然性に基づいたもの」ばかりともいえない。

(7)　もちろん，実質的な意味において，ホウプとマーガレットには性的な男女関係はなく，義理の兄妹として暮らしていく。そしてまた，マーガレットは始終，無邪気で清廉な女性という設定であり，ホウプの感情に気が付いていないようにふるまっている。ただし，この不自然な三者共生は，ホウプ自身のマーガレットへの思慕を断ち切らせることを妨げるだけでなく，後々，マーガレットを慕うエンダービーに二人の仲を勘ぐられる最大の原因を作ってしまうことにもつながっていくだけに，決して見過ごすことのできない事象であるといえる。

従来，批評家たちは，独身女性を貫くマライアと，彼女と同じような道を歩むかのように最後まで描かれるマーガレットとのやり取りの中に，当時の中流階級の未婚女性たちの社会的な不安定さを読み取り，マーティノーが小説内で問題提起であると主張してきた。しかし実際のところはどうなのだろうか。ホウプとの結婚において，ヘスターは社会的安定を得たのかと言えば，逆に，村八分にされて社会的にも経済的にも不当な制裁を村民から受け，孤独感をつのらせなくてはならない。対するマーガレットはどうなのか。ホウプの義妹として同居する彼女もまた，ヘスターと同様，ホウプの庇護下にある限り，彼の経済的，社会的状況が悪化すれば，自身の状況も悪化してしまうという不安定な身分に甘んじなくてはならない。だがそれは姉妹が頼りにするホウプの個人的な都合によるものであり，彼女が未婚であるか，既婚であるかという身分の違いに起因するものではない。そもそもマーガレット自身はホウプではなく姉との共生を必至としているため，ホウプの経済的／社会的状況によって彼女の実際上の生活が影響を受けたとしても，その心持ちは変わるものではない。それを示す端的な例として，マーガレットがエンダービーとの結婚を，その気持ちとは裏腹に延期させてしまうことになるエピソードが二つある。その一つ目は，エンダービーが，既に別の金持ち女性と婚約しているという噂を否定するためにマーガレットに会いに来て，「僕の人生の導き手になってくれませんか」と愛を告白した直後に，彼女の頭によぎる考えである。

> マーガレットは深くため息をついた。本当に幸せなこの瞬間にさえも，彼女は姉のことを考えていた。エドワード［ホウプ］を人生の導き手とするにあたってヘスターの期待がどういうものであったのか，思い出していた。

そしてこの後，エンダービーの問いにこう答える。

> 「今のところはこれで十分よ。私はまだ先のことを考えられないの。」(325)

ここでマーガレットはエンダービーとの関係が修復されたことを喜ぶ一方で，姉を思い，結婚を先延ばしにしようとしている。これと同じような現象はもう一度，今度はホウプ家の家屋が村人たちに襲撃された後，マーガレットの身を案じたエンダービーが自分たちの結婚を予定より早めようと提案した際にも起こる。

「私は離れられないと思うの。それに，そのような自惚れた気持ちが心地よくもあるし。エドワードとヘスターは今，私がいなくてはやっていけないわ。（中略）二人には私の助けが必要なの。二人は私の持っているなけなしのお金を必要としているし，私の手助けも，知恵も必要なの（以下略）。」(422–423)

これらの場面で明らかなのは，逆に，ホウプの窮状が悪化すればするほど，ヘスターと共にいることはマーガレットにとって正当化される理由となり，「未婚」という孤独を味わう必然性がなくなっていくという事実である。「二人には私の助けが必要なの」というマーガレットのセリフからも明白であるように，彼女は社会的には単独であるとされる未婚女性ではあるものの，自分を絶対的に必要とする姉夫婦と共生することで，マライアの感じる典型的な未婚女性の不安定な精神状況とは異なる身分を享受している。

そしてとりわけ *Deerbrook* で特徴的なのは，この三者共存関係が，家父長制の社会において定義される「結婚」（すなわち男性による女性の囲い込みに現れるように男性主導の男女関係）を前提に始まったものでありながら，現実としてそうならず，むしろ男性劣位の生活へと導かれていくという点である。結婚後，ホウプは選挙において，周囲の反対を押し切り，自分の信念で選んだ人物に票を投じたが，そのことが原因で，村の住民たちの反発を買い，ロウランド夫人が流したホウプに関する根拠のない噂がそれに拍車をかけ，彼は経済的にも社会的にも窮状に陥ってしまう。ホウプの試練がピークを迎えるのは，彼の家に押しかけた村人たちが家を破壊し，ホウプの人形（ひとがた）を作って行進することで，彼と家族を侮辱する場面であろう。

行列が通りを進んでいるようだった，ひどい音楽のようなものが聞こえた。一つの集団がホウプ氏の人形（ひとがた）を持ってきて，燃やそうとしていた。それはひどいものだった。火の光に照らされてよく見えた。首周りには絞首用の綱がまかれ，右手にはナイフを持ち，左手には，薬瓶を持っていた。そしてその薬瓶はホウプの診療室から略奪した本物だったのだ！(370)

ホウプ家が襲撃されていることを知って援助に駆け付けていたエンダービーが「これは耐えられないほどひどすぎる！」と叫ぶ一方で，ホウプ自身は「彼自身の化身［人形］を見て心底笑い転げ」る。エンダービーはまもなくこの人形（ひとがた）に対抗するべく，骸骨（の模型）を持ち出して群衆を威嚇し，人形は火に焼かれる前に救い出されるのだが，

その間，襲撃の標的になっているホウプ自身は，ヘスターに「もうこれ以上笑わないで」と懇願されなくてはならない。この場面において，攻撃の対象となりながら，立ち向かう素ぶりさえ見せないホウプは完全な被害者であり，弱者である。そして，彼の代わりにホウプ家を守るべく立ち向かっていくのは，マーガレットの身を案じて駆け付けた，彼女の婚約者エンダービーのほうである。

医師として科学に精通し，ゆえに無知で野蛮な村人よりも思慮深く理性的であるという設定であるホウプだが，いかに冷静沈着であっても，ホウプのアンバランスな感情表現として，その場の空気にまったくそぐわない不自然な「笑い」は，彼自身の精神状態の破たんと，「科学」の象徴である医師としての身分放棄を象徴的に表している⑻。そして実際，薬瓶を手に持った人形を村人が火にくべようとする行為は，それ自体，ホウプの医師としての存在の社会的抹殺の企て，および実行であることに変わりはない。ホウプ家襲撃からまもなく後，村には新しい医師，ウォルコットがロウランド夫人の差し金で入り込み，ホウプの患者を取り込んでいく。小説の第三部では，ホウプはいよいよ職にあぶれ，ホウプ家の財政は，使用人全員を解雇するのみならず，日々の食事にも事欠くまでに逼迫するようになるさまが描かれ，ここまでくれば，マーティノーの作品はジェイン・オースティンの恋愛と結婚にまつわる男女間の駆け引きを描いたロマンスとはかけ離れた内容になっているということは，どの読者にも明らかである。ホウプの苦境ゆえに「より幸せで，より理想的で，より勇敢な」ヘスター（420）。無収入に陥ったホウプのために貯金を切り崩し，使用人を手放さざるを得ない状況下，赤ん坊の世話で忙しいヘスターの代わりに自ら家事労働に従事する妹のマーガレット。そして，ホウプはこのような状態になっても決して自分の信念を曲げないため，例えば一つの解決策として *Deerbrook* を去って新天地に職を探そうとしたりはしないのである。三人の共同生活において，夫がその男性的権威を失墜させる一方で，姉妹は二人で力を合わせ，生活を切り盛りするたくましさを身につけていく。

マーティノーによる「姉妹もの」小説は，幸せな結婚ですべてが丸く収まる19世紀的家庭小説の系譜から少しずれ，結婚後の苦境の中でたくましくなる女性を描いた点が斬新であるといえよう。ただし，残念なのは，女性たちの強さはあくまでも相手男性の相対的脆弱化によって一時的に引き起こされていたにすぎず，最終的に男性の社会的・経済的地位

⑻　例えばキャロライン・ロバーツは，19世紀にその社会的地位を確立した職業人としての「医者」をホウプの描写に照らし合わせ，ホウプの科学的で理性的な言動をテキスト内に見出し，分析している。

が復旧したと同時に，正統な「ハッピー・エンディング」，すなわちヒロインの幸せな結婚で幕を閉じるところである。小説の最後で，村を襲った疫病の撲滅に尽力し，村人の改悛と信頼を得るホウプは，親族の遺産が舞い込んで，社会的にも経済的にもその地位を一気に回復させることに成功する。そして同じとき，マーガレットはついにエンダービーとの誤解を解いて結ばれる。マーガレットの結婚のおかげで，ヘスターもまた，ようやくホウプと一対一の結婚生活を始められることになり，ここに二組のカップルが幸せな結婚を果たし，物語はオースティン風のエンディングを迎える。物語の導入部分と終結部分でオースティンの小説を模倣し，中途部分においては自己の主張とオリジナリティをちりばめた小説，*Deerbrook* は，その中盤部分において特にマーティノーらしさを発揮できた作品といえよう。

参 考 文 献

〔1〕 David, Deirddre. *Intellectual Women and Victorian Patriarchy.* London: Macmillan Press, 1987.
〔2〕 Easley, Alexis. "Gendered Observations: Harriet Martineau and the woman question." *Victorian Women Writers and the Woman Question.* Ed. Nicola Diane Thompson. Cambridge: Cambridge University Press, 1999. 80–98.
〔3〕 Figes, Eva. *Sex and Subterfuge: Women Novelists to* 1850. London and Basingstoke: Macmillan, 1982.
〔4〕 Kahn, Jacque. "Disruption and Disclosure: Women's Associations in Harriet Martineau's *Deerbrook.*" *Victorian Literature and Culture* 23,pp. 215–31, 1995.
〔5〕 Martineau, Harriet. *Deerbrook.* 1839. Penguins Books, 2004.
〔6〕 ——. *Autobiography, with Memorials by Maria Weston Chapman,* 3 vols. London: Smith, Elder, 1877.
〔7〕 Roberts, Caroline. *The Woman and the Hour: Harriet Martineau and Victorian Ideologies.* Toronto: University of Toronto Press, 2002.
〔8〕 Scholl, Lesa. *Translation, Authorship and the Victorian Professional Woman: Charlotte Brontë, Harriet Martineau and George Eliot.* Burlington: Ashgate Publishing Company, 2011.
〔9〕 Sanders, Valerie. Introduction. *Deerbrook.* By Harriet Martineau.